

文献案内——本書で論じたことをもっと学びたいなら

※出版社のウェブサイトに掲載されている文献にのみリンクを貼った。

第1章

みなさんの世代は、生まれた時から「外国人」がごく身近な存在になってきています。日本で働く外国人労働者の実態については、[西日本新聞社編『〔増補〕新移民時代—外国人労働者と共に生きる社会へ』明石書店、2020年](#)が参考になります。早稲田ジャーナリズム大賞を受賞した本書は、日本社会にいま暮らしているリアルな外国人の姿を教えてください。さらに本章ではグローバリズムについて論じました。2000年代初頭にはまだあった手放しのグローバリズム礼賛論のバイブルといわれた本が[トーマス・フリードマン（伏見威蕃訳）『フラット化する社会—経済の大転換と人間の未来（上）』日本経済新聞社、2006年、同（下）](#)です。アメリカ合衆国のジャーナリストであるフリードマンが世界中を駆け巡り、グローバリズムで変わりゆく世界について自己啓発的に語る本書は、いまから読むとやや胸やけがしてしまいますが。2008年のリーマンショックを経て2010年代に入ると、グローバリズムに批判的な本が数多く登場します。[サスキア・サッセン（伊豫谷登士翁監訳）『グローバル・シティー—ニューヨーク・ロンドン・東京から世界を読む』ちくま学芸文庫、2018年](#)は2001年に原書が出版された、グローバリズムを論じるうえでは必読の書です。ロンドンやニューヨークといった、国民国家を超える力をもつ「世界都市」の出現が世界のシステムをどのように変えていくのかが論じられています。[マイク・デイヴィス（酒井隆史監訳）『スラムの惑星—都市貧困のグローバル化』明石書店、2010年](#)は、グローバル化がひきおこす農村から都市への急激な人口移動が、都市に大規模なスラム街をつくりあげ、貧困を再生産するメカニズムを論じています。ロバート・ライシュ（雨宮寛他訳）『最後の資本主義』東洋経済新報社、2016年では、クリントン政権の労働長官を務めたライシュが、グローバル化による労働者の暮らしの悪化による資本主

義の危機に警鐘をならしています。さらに日本でも 700 頁の大著にもかかわらず 13 万部のベストセラーになった [トマス・ピケティ \(山形浩生他訳\)『21 世紀の資本』みすず書房、2014 年](#) は、経済成長と所得の分配についての長期的な調査を踏まえ、今日の格差社会の危機を理論的に立証しています。 [サスキア・サッセン \(伊藤茂訳\)『グローバル資本主義と〈放逐〉の論理—不可視化されゆく人々と空間』明石書店、2017 年](#) は、グローバル化の進行により、貧困、難民、環境破壊が複合的に生じていると警告を発しています。こうしたグローバル化がもたらす対立を包括的に論じたのが [イアン・ブレマー \(奥村準訳\)『対立の世紀—グローバルイズムの破綻』、日本経済新聞出版、2018 年](#) です。本書はグローバル化についてどのような議論や論点があるかを知るうえで役に立つでしょう。他方でグローバル化による情報技術の進化と知識の普及に着目した [リチャード・ボールドウィン \(遠藤真美訳\)『世界経済大いなる収斂—IT がもたらす新次元のグローバル化—』日本経済新聞出版社、2018 年](#) は、グローバル化が過去のような先進国と第三世界の境目をなくしていくというもうひとつの側面を強調しています。グローバル化は一国内の格差を広げる一方、国同士の格差を縮小していくというわけです。また、グローバル化は文化やスポーツにも大きな影響を与えています。 [ジェームズ・モンタギュー \(田邊雅之訳\)『億万長者サッカークラブ—サッカー界を支配する狂喜のマネーゲーム』カンゼン、2018 年](#) は、グローバル化による富の集中がコミュニティ中心のサッカークラブを変容させていく実態を批判的に描いています。

第 2 章

第 2 章ではここ 10 年の、SNS の爆発的普及をはじめとした情報技術の発達、政治やコミュニケーションの環境をいかに変えたかについて論じました。 [佐藤卓己『流言のメディア史』岩波新書、2019 年](#) は、メディア史の研究者が 2011 年の東日本大震災の時に発生したデマ／流言を歴史的に考察したものです。情報技術の発達が人々のコミュニケーションに与える効果を考えるうえで参考になります。SNS 上の政治言論については、90 年代からはじまる「ネット右翼」の言説を分析した [伊藤昌亮『ネット右派の歴](#)

[『史社会学』青弓社、2019年](#)が参考になります。[樋口直人他『ネット右翼とは何か』青弓社ライブラリー、2019年](#)は8万人の大規模な社会調査を踏まえてネット右翼の実像の解明を試みています。また[樋口直人・松谷満編著『3・11後の社会運動—8万人のデータから分かったこと』筑摩選書、2020年](#)も、2010年代に大規模化したデモや集会について実証的な分析を行っています。さらに[小熊英二・樋口直人編『日本は「右傾化」したのか』慶應義塾大学出版会、2020年](#)は、この10年間で日本社会がよりリベラルな方向に傾いたことの実証分析です。こうした客観的なデータ分析を踏まえた解説こそが、大局的な世の中の動きを理解するうえで欠かせません。この10年で世界も様変わりしました。2016年大統領選挙におけるトランプ大統領の誕生は、それまでの社会科学やジャーナリズムの常識を覆す事態であり、数多くの本を生み出しました。[金成隆一『トランプ王国—もう一つのアメリカに行く』岩波新書、2017年](#)は朝日新聞の特派員である著者が、トランプが勝利したアメリカ中西部に暮らしながら、地元の人々と交流しながら書き上げたものです。著者は以後数冊の貴重なルポルタージュを発表しています。同じようにカリフォルニアから南部ルイジアナ州に移住した社会学者の社会調査が[A.R.ホックシールド（布施由紀子訳）『壁の向こうの住人たち—アメリカ右派を覆う怒りと嘆き』岩波書店、2018年](#)です。「誰が、なぜ、トランプを支持したのか」を知るうえで貴重な記録です。トランプ政権と人種差別に対抗して台頭した「ブラック・ライブズ・マター」運動の記録としては[アリシア・ガーサ（人権学習コレクティブ訳）『世界を動かす変革のカーブラック・ライブズ・マター』明石書店、2021年](#)があります。黒人女性である著者が草の根の運動をつくりあげていく過程を描いた本書からは、この運動がメディアをつうじて私たちに伝えられた「派手さ」が表面的なもので、実際は地道なものであることが理解できます。この10年は東アジアの政治と社会運動も大きく変わりました。[倉田満・張彥馨『香港—中国と向き合う自由都市』岩波新書、2015年](#)は、香港の民主化運動が生まれてくる歴史的な経緯を知るうえで参考になります。[文京洙『文在寅時代の韓国—「吊い」の民主主義』岩波新書、2020年](#)もまた、激動の韓国社会を知るうえでの基本書といえるでしょう。

第 3 章

第 3 章では“みんな”という言葉キーワードに、民主主義、リベラリズム、ポピュリズム、ナショナリズムについて解説しました。NHKで放映された「ハーバード白熱教室」で有名なサンデルの[マイケル・サンデル（鬼澤忍訳）『実力も運のうちー能力主義は正義か』早川書房、2021年](#)は、リベラル派の能力主義を礼賛する言説こそがトランプ政権を生み出したと論じています。経済的、文化的な格差に無頓着な「リベラル」に対して、コミュニティの再生を掲げるサンデルの主張は日本の政治を考えるうえでも大変示唆的です。サンデルが指摘するような、ネオ・リベラリズムがもたらす社会的、経済的な不安と剥奪感を考えるうえでは[ジョック・ヤング（木下ちがや監訳）『後期近代の眩暈ー排除から過剰包摂へ〔新装版〕』青土社、2019年](#)が参考になるでしょう。ポピュリズムについてはいまでも数知れない論争が行われています。[ヤン・ヴェルナー・ミュラー（板橋拓己訳）『ポピュリズムとは何か』岩波書店、2017年](#)はポピュリズム研究の代表的な著作ですが、ポピュリズムを民主主義とは相いれないものと捉えています。これに対して[カス・ミュデ／クリストバル・ロビラ・カルトワッセル（永井大輔・高山裕二訳）『ポピュリズムーデモクラシーの友と敵』白水社、2018年](#)はポピュリズムも民主主義の一形態であるととみなしています。[エンツォ・トラヴェルソ（湯川順夫訳）『ポピュリズムとファシズムー21世紀の全体主義のゆくえ』作品社、2021年](#)はポピュリズムとファシズムの差異について分析しています。こうしたポピュリズムについての論争をまとめたのが[水島治郎『ポピュリズムとは何か』中公新書、2016年](#)です。ポピュリズム政治を観察するうえでは本書の整理が参考になります。ポピュリズムと民主主義、ファシズムがどのような関係にあるのかは現在も論争が続いていますが、論争的であること自体が民主主義が極めて不安定な状態にあることを示しています。そしてこの不安定さをもたらしたのが「新自由主義」です。[デヴィッド・ハーヴェイ（渡辺治監訳）『新自由主義ーその歴史的展開と現在』作品社、2007年](#)は、1970年代から台頭する新自由主義的な政治が、社会経済的な安定を破壊し、90年代のグローバリズムの時代を準備した過程を論じています。ナショナリズムについては過去の

膨大なナショナリズムについての学説を踏まえた[エリック・ホブズボーム](#)（浜林正夫訳）『[ナショナリズムの歴史と現在](#)』大月書店、2001年が基本書といえます。ベネディクト・アンダーソン（白石隆・白石さや訳）『[想像の共同体—ナショナリズムの起源と流行](#)』書籍工房早山、2007年は「想像される共同体」というナショナリズムを考察するうえでカギとなる概念を生み出しました。そしてホブズボームやアンダーソンが「特殊」とみなす日本のナショナリズムについては[丸山真男](#)『[日本の思想](#)』岩波新書、1961年が参考になるでしょう。

第4章

第4章では「民主主義の危機」を念頭に、第二次世界大戦後の日本の歴史を扱いました。[ヤシヤ・モンク](#)（吉田徹訳）『[民主主義を救え！](#)』岩波書店、2019年は、世界中の民主主義の状態について調査をした著者が、戦後世界につくりあげられてきた民主主義が新自由主義によって破壊されていくさまを明らかにしていきます。リベラルが“ネオ”リベラル（新自由主義）になることで自滅していく、したがって問題はトランプ元大統領にあるのではなく、リベラル自身にあると論じたのが[マーク・リラ](#)（夏目大訳）『[リベラル再生宣言](#)』早川書房、2018年です。第二次世界大戦後の「戦後史」を知るうえでの必読文献ですが、政治史について基本中の基本書といえるのが[石川真澄・山口二郎](#)『[戦後政治史 第四版](#)』岩波新書、2021年です。朝日新聞記者であった故石川真澄のデータを用いた戦後政治の解説は、政治学を学ぶうえで最初に読む本といわれています。石川氏が亡くなって以降は、政治学者の山口二郎氏がアップデートしています。平成時代は冷戦崩壊とほぼ同時にはじまりましたが、この30年の同時代史については[小熊英二](#)編『[平成史〔完全版〕](#)』河出書房新社、2019年が参考になります。また[小熊英二](#)『[社会を変えるには](#)』講談社、2012年は社会運動の観点から戦後日本史を描いている点が特徴的です。私たちは戦後社会に形成された民主主義を「戦後民主主義」と呼びますが、この形成過程を文化に着目して描き出したのが[ジョン・ダワー](#)（三浦陽一他訳）『[敗北を抱きしめて—第二次大戦後の日本人〔増補版〕（上）](#)』岩波書店、2004年、同（下）

です。さらにさかのぼって近代以降の日本の歴史を知りたいならば、[アン
ドルー・ゴードン（森谷文昭訳）『日本の 200 年—徳川時代から現代まで
新版（上）』みすず書房、2013 年、同（下）](#)がとても参考になります。み
なさんの世代の政治の大半を占めていた第二次安倍政権の社会経済政策
については、[軽部謙介『官僚たちのアベノミクス—異形の経済政策はいか
に作られたか』岩波新書、2018 年](#)が参考になるでしょう。そしてこの安倍
政権の社会経済政策がグローバル化時代における危機の先送りであるこ
とは[ヴォルフガング・シュトレーク（鈴木直訳）『時間かせぎの資本主義—
いつまで危機を先送りできるか』みすず書房、2016 年](#)が教えてくれます。
私たちは過ぎ去りゆく戦後のうえに、新しい政治をつくりあげなければな
らなくなっています。[吉田徹『アフターリベラル—怒りと憎悪の政治』講
談社現代新書、2020 年](#)は、グローバル化がもたらす多様性や個人化と、政
治における敵意と憎悪の広がりとの関連性を踏まえて、新たな社会集団の形
成の必要性を唱えています。

第 5 章

第 5 章では、2021 年の第 49 回総選挙の構造分析と、日本社会のイデオ
ロギー（政治意識）について論じました。2020 年のアメリカ大統領選挙に
ついては、みなさんの中にもハラハラしながら観ていた人は少なくない
と思います。[朝日新聞取材班『分極社会アメリカ—2020 年米国大統領選を追
って』朝日選書、2021 年](#)は現地での大統領選がどのように伝えられ、受
け止められていたのかを教えてくれます。第 49 回総選挙で踏みとどま
った自由民主党の「強さ」を知るには[中北浩聖『自民党—「一強」の実像』
中公新書、2017 年](#)：[牧原出『「安倍一強」の謎』朝日選書、2016 年](#)が参考
になるでしょう。また、安倍政権を新自由主義の角度から批判的に分析し
た[渡辺治『安倍政権の終焉と新自由主義政治、改憲のゆくえ—「安倍政治」
に代わる選択肢を探る』旬報社、2020 年](#)も参考になります。今回の総選挙
では、残念ながら激動の東アジアの中で日本がどうするべきかが問われま
せんでした。[ジョン・ダワー／ガバン・マコーマック（明田川融・吉永ふ
さこ訳）『転換期の日本へ—「パックス・アメリカナ」か「パックス・ア](#)

[「アジア」か』NHK 出版新書、2014年](#)は、転換期の日本の外交、安全保障について巨視的に捉え、「アジア」の中で日本がどのような進路をとるべきかを考えさせてくれます。日本の政治意識の世代間の違いについては、[遠藤晶久／ウィリー・ジョウ『イデオロギーと日本政治—世代で異なる「保守」と「革新」』新泉社、2019年](#)の実証研究が参考になります。イデオロギーという厄介な概念については本論でも述べたように膨大な著書がありますが、[カール・マンハイム（高橋徹・徳永恂訳）『イデオロギーとユートピア』中公クラシックス、2006年](#)は、イデオロギーを星と星をつなげて星座を描くような相関的なものと捉えました。星という実在するものをつなげて星座にするのは私たちの主観であり、したがって私たちの政治や社会に対する意識もまた、実在するものを捉えながら私たち自身がつくりあげているわけです。ともあれ、イデオロギーといった抽象的で厄介な概念をまず理解するにはどうしたらいいか[レイモンド・ウィリアムズ（椎名美智他訳）『完訳 キーワード辞典』平凡社、2011年](#)は大いに役に立つでしょう。ウィリアムズはイギリスの「カルチュラル・スタディ」という学問の元祖といわれる人ですが、「イズム」「ヘゲモニー」そして「イデオロギー」といったよくわからない概念を、解きほぐすように解説しています。社会科学はまず概念の定義を理解することからはじまりますから、よりよい辞書、辞典と出会えることが大切です。本書では時代と空間を行ったり来たりしながらいろいろなことを扱い、論じてきましたが、20世紀という時代の対する基本的な見方は[エリック・ホブズボーム（大井由紀訳）『20世紀の歴史—両極端の時代（上）』ちくま学芸文庫、2018年、同（下）](#)を最も参考にしました。20世紀の歴史観をつくりあげたといわれるこの本の読破にぜひ挑戦してみてください。最後に、本書では政治学を説明するうえでたくさんの映画、漫画、アニメを取り上げてきましたが、これは僕がたんに好きだからというだけではありません。取り上げてきた作品をネットで検索したら、もうあふれるばかりの感想や評論がヒットすると思います。私たちは共通のポピュラーな物語を観て、感じたことを人と共有したいという欲望を持っています。漫画やアニメ、映画は、私たちが“みんな”をつくりあげていくにあたっての共通のツールなのです。僕が台湾や韓国、タイにでかけても、同世代で知り合った人たちと大いに盛り上がるのはや

はりともに観たことがある作品についてです。それをいつ観た、どう思った、ああでもないこうでもない論評する中で、言語や民族の違いを越えてお互いを理解していくのです。そしてこうした文化がポピュラー（大衆的）なものになったのは、20世紀の大切な遺産でもあります。本書の中で多くの論者が警告している格差社会は、この共通の財産を奪い取る可能性もはらんでいます。[鶴見俊輔『戦後日本の大衆文化史 1945～1980年』岩波書店、2001年](#)は、戦後日本が大衆的な共通文化を育んできたことこそが戦後民主主義の土台にあることを強調しています。「政治的なもの」は国会議事堂の奥にだけあるものではなく、僕やみなさんが生きる日常世界の中に織り込まれています。みなさんがなにかの機会でなんらかの共通の目標を達成するために人と一緒に取り組むとき、対立と結集を繰り返す闘技的な物語になぞらえることは集団に潤いを与えます。「政治」とはまさに、私たちの日常世界の中で物語を再現することですから。